

むすび

—創刊号—

栃木県青年神職むすび会

発行所 栃木県青年神職むすび会事務所
編集発行人 横瀬勝寿

栃木県神社庁内(2)2394
印刷所 栃木新聞社印刷局

会報「むすび」創刊のあこがれ

会長 横瀬勝寿

甲辰の初春を寿ぎつつ先輩諸賢の玉稿を仰ぎ、此処に会報「むすび」の創刊号を発刊することの出来ましたことは、会員各位と共に慶賀に存ずる次第であります。本会は一昨年三月四日、多数同志の賛同を得て盛会裡に発会することが出来ました、会則第三条に「会員相互の研修と親睦を計る」とあります通り、会員諸氏の自己研鑽と相互理解の為の親睦とを目的としていたのであります。

然乍、過去二ヶ年間に会員諸氏の幾多の努力にも不拘、これらの事柄が十分に理解されていぬ、会の発展に大きな支障を来たしてをりますことは会長の不徳の至す処甚だ遺憾であると存じます。幸いにも新春の吉日に会報「むすび」の創刊号を発刊することが出来ました、この機会に目的の意を二点に分ち会員諸氏の御理解を得ると共に今後の会に対する絶大な御協力の資としたいと存じます。

一、自己研鑽は何故必要とされるか。
戦後十九年、斯界が一般社会と比して如何なる現実置かれておるか、日々の社会生活を一見致すならぼ了然たるものがありましょ

戦前に於ては、国家的権力(善意的)の背景が、亦戦後に於ては未曾有の混乱があつたにせよその時代に於いて、神職各自その学究的努力の上に高い社会的見識と、高い社会的地位とを持って斯道の高揚確立に尽された先哲の実績は高く評価せねばならず、先哲の築かれたこの石礎を基に今後共一神職として尽さねばならぬと意も新になるものがあります。

然し、戦後の混乱期を耐え忍びつつ、その高揚を計つて来たとは云え、この間に青年層の育成向上の為に意の欠ける点のあつた斯界と、その過を身をもって正し、自己を鑽くべく自覚しなかつた青年神職とに激しい憤りを感じずにはいられないのであります。

こうした経過の歴史的生の子が今日一般社会からは、青年神職の社会的見識も地位も極度に低下させた現実を吾々に背負わさせ、又青年層の薄弱なことの為、斯界の現実がつぼみ行く吾身にただ困窮し、如何にしてこの窮地を脱却し得るか、根本的、長期的その対策を思考せぬ誠に悲しむべき実体を露見しているのであります。

この様な過去の歴史を造り上げた参つた先哲は責任の基に斯界の

将来が容易ならざるを理解把握し、高い次元に立つてすみやかに心を開き、青年の育成に努めるべきでは有りませうか。

尚一方、先哲の過ち犯した現実が存るとは云え、幾多の哲理と体験とを会得出来得る能力の可能性を持つて居ることを知っている青年神職よ、今日吾吾は十分な研鑽をおこたり、斯道に対する積極的な意欲と愛情に余りにも欠けるものがあるのではなからうか、はたして青年はそれでよいのかどうか再考する必要があるまいか。

青年の力量の必要性を叫ばれた時に単純な若き情熱だけでは、その要望に答える事は出来ないでしょう。そこには高度の知識と数々の哲理を踏んだ体験とが必要となり、その力量を役立てた時にこそ、始めて神道高揚に身を捧げ得ることの出来る希望ある青年神職として社会から認められ、町や村の氏子教化にも役立ち、自から青年神職の社会的地位も高まるであらうと同時に、斯界の内容も正しく評価される処となるでしょう。

斯道発展、自己成長の為に会員諸氏の研鑽を叫ぶ必要性が生れ、第一の真の意義も此処に存するのであります。

二、会員相互の親睦は何故必要とされるか。
斯界には人間関係の密接さが稀薄で有るやに思えてなりません。特に本県に於ては島嶼性的気風が強い様に感ぜられることは、誠に悲しむべき事でありませう。

こうした事柄が人間の研究、人材輩出の点に更に、斯道組織強化の面に大きな障害となつて居ると申すははたして過言ではないでしょう。

尚更に、旧官民社と云う今日では問題にならない劣性遺伝子的精神が存し、吾吾青年の骨肉深くさへもその影響を与えて居ることは余りにも吾々の社会が狭いと云うことが出来るのではありますまいか。時にはこれが優越感となり、或る時には劣等感となつて本会の発展の疎外の一端となつて居ることは考え直さねばならない点であります。

こうした事柄は、皆日本人特有の島嶼性的内容から来ているものであるかも知れない。本会に於てはこの様な気風を全く歓迎しない事を会員諸氏濡れなく把握して置いてもらいたい。

若し、吾々が愈々斯道の高揚を願うのであるならば、各人それぞれ人を知り、その心を知り、青年神職層の充実を計るべく努力しなければなりません。
数と能力の叫ばれて居る今日にあって、県内の数少ない神職が共に拝眉もなく生活している実状では如何に氏子教化、神道再認識を叫んでも統一的内容行動はとれず

その実も薄いものがありまよう。人間研究の場が親睦です。青年神職の夢と希望と懇の発露の場が親睦です。これ親睦の本旨です。以上二点を十分御理解下さるならば本会が如何なる目的を持ち、如何なる方向に、又何故二年前に結成する必要にせまられたかを御推察出来るものと信じます。故ケネデリー大統領がその名言の中で「國が自分に何をしてくれぬかを問うな。自分が國に何が出

青年神職へのこゝろば

栃木県神社庁長

石原重殷

来るかを問え」と云っている様に新鮮な思想を持ち、斯道を思う熱情ある青年よ、若き時代には気魄だけでもかく有るべきではないか。信念と自信とに満ちた青年よ、その時代を研鑽しようではないか。多くの先哲も次代を背負う斯界の青年の為に、よき指導者、よき父母、よき大地となって道を教え鞭撻下さることを切に願ひ、創刊の御挨拶にかえる次第です。

龍年という躍進の年を迎え、愈々奮起、神ながらの大道宣布に力を効さなければならぬとき、県下の青年神職が互に結び合い、和を以て青年神職の組織をつくり、懇々発露し、下向きに活動を続けこのたび機関紙「むすび」が創刊されます。これは斯道のため洵に感激に堪えません。今更申上げるまでもなく、斯界の将来は青年にあり、国の隆衰又青年の双肩になわれている。まつりの精神を中核とした人間完成と國作りがさげばれているとき、最近生活と宗教についての関心が高まりつゝあり、一時の放心的状態からようやく自己の内部目的が向けられ始めてきた映画やテレビ、マスコミなど神社のまわりに対しかんしんをよせ始めていることはよろこばしいことであるが、

このときにあたり、神社人は実践の大道に前進しなければならぬと信ずる。本庁十五周年記念大会に於ては「光輝ある伝統に頼み、現下の事態に応じ益々神社神道の本義に徹し、斯道の宣布昂揚につとめ、大和一致以て祖國の興隆と世界の共存共栄に寄与せんことを期する」と宣言した。昨年十月二十六日には全国氏子青年会の組織が出来たことも、この意味において洵によろこばしいことである。今度むすび会が氏子青年会組織につながるに際し、運営活動その他の面に容易ならざるものがあると思うが、要は青年神職によるのみ果される活動面の戦士として新しい道を開拓し、氏子青年組織や子供会の育成、神社教化対策

創刊号によせて

栃木県神社庁理事

柳田耕平

私は戦後二十一年秋大麻頒布式の佳日に支部の総会を兼ねた席上、前々から神社界が官国弊社と県社以下の神社との隔たりが余りにもありすぎ、従つて奉仕神職の格式も扱いも問題にならなかつたことをこの目で見、耳に聞いて、そこへもって来て神道指令に遇つて追放を受けたばかりのところ

なったのが私だったことを総会の紛意から感じ、血の気の多い私の胸を打たせた結果が私の今日を左右した一つの原因だったと思つている。あの当時はことんまで局面を打開する為議論をした。疲弊のどん底から立ち上る絶叫のような姿が小さい弱い私共の姿であった。当時私は数えて廿九才分別はあったつもりでいたが、どこでも衝突した。そして八・九割は我を通した。尤も八九割の中で七八割は意見が合ったから妥協の幅が少なかっただけであると近頃になつ

て悟った。私は天皇と親と私的な立場に於ける先輩を除いて格差を意識しない性格を持っている。人間として立派な人は誰でも尊敬するが仕事をしないで格式の座にある人は私以下だと思つて過して来たから私の後半生は大変だと今から覚悟を決めて進退の時機を過らさないよう、亦働ける限りはもっと進出しようとする四十八才の抵抗を感じている。

え、世の中が混乱のさ中にあつて、神社の当面の問題が私の全生命だったので皆の推されるまゝ支部長の座についたことが、昨日のように新しい。あの時の支部総会は県の中央が混乱して前々からの臨時総会から話題になつていた神職会から神社庁の創立当時の移行の内容が主で、支部はどう対処するかが議論で、法人令施行に伴う問題とからみ合つて神社を将来どう持つて行くかが重要な案件だった。結局、この難関を内外共に勇氣と情熱とを以て改革し、きびしい世想に乗つて行く若さの対象に

なつたのが私だったことを総会の紛意から感じ、血の気の多い私の胸を打たせた結果が私の今日を左右した一つの原因だったと思つている。あの当時はことんまで局面を打開する為議論をした。疲弊のどん底から立ち上る絶叫のような姿が小さい弱い私共の姿であった。当時私は数えて廿九才分別はあったつもりでいたが、どこでも衝突した。そして八・九割は我を通した。尤も八九割の中で七八割は意見が合ったから妥協の幅が少なかっただけであると近頃になつ

こゝまで私の若い時代の中、神社界に暮した概要を書いたが、実は本場の青年時代は学校と兵隊で暮して何にも他の世界は知らない。その男が一変にして戦後の社会に我無しやら突込んだので、仕事もしたがわがままもあつたかも知れない。神社のこと、支部のこと、神社庁のこと、伊勢のこと、その他支部長と云うのは今まで大変なことで、その上やはり地域の間をやらぬと、支部長としての対外的地位が保てないし、人一倍の勉強と努力が強制される。これも皆若い時代の訓練の結果だつた。青年神職時代の生甲斐を感じている。唯非常に遺憾に思つたことは私の対外活動より内部即ち神社界の中でも栃木県の中核部の人達が若い人の活動にブレーキをかけること云うことが一番不愉快だつたことを思い出す。財政権を握っている人達、経済的に豊かな人達にそばを向かれると青年の活動はかけ声に終つて了う。

今度むすび会が氏子青年会組織につながるに際し、運営活動その他の面に容易ならざるものがあると思うが、要は青年神職によるのみ果される活動面の戦士として新しい道を開拓し、氏子青年組織や子供会の育成、神社教化対策

なつたのが私だったことを総会の紛意から感じ、血の気の多い私の胸を打たせた結果が私の今日を左右した一つの原因だったと思つている。あの当時はことんまで局面を打開する為議論をした。疲弊のどん底から立ち上る絶叫のような姿が小さい弱い私共の姿であった。当時私は数えて廿九才分別はあったつもりでいたが、どこでも衝突した。そして八・九割は我を通した。尤も八九割の中で七八割は意見が合ったから妥協の幅が少なかっただけであると近頃になつ

何時の時代でもそうであるが特に明治維新を實行した人々伊東、桂(木戸)、坂本、高杉等々数え

正月様

矢島清文

しんしんと大歳の夜のきはまるに、正月の音きこえ来にけり、歳いまだ 改るべし。深き山森をとほりて、とよみくるなり、かをやぎて、かがり火をたけ、かがやきて、新しき歳、そこに現れなむ、うてや太鼓を、とどろくに、清く現れたり。稚き正月陸月たつ朝のよろしさほのぼのと、日本のこころよみがへれかし (神社庁講師)

切れない勤王の志士も幕府を守ろうとした新撰組を始め幕下会津の上層青年も皆議論家であり、実行家で情熱をもやした青年群像であり、裏に吉田松陰あり、島津的重臣ありその上に財力が控えていたことを忘れることが出来ない。

藤の力が大きい時代の青年は恵れる。期待ばかりして議論の指導許りして金と地位向上を与えない上層部は居て害をなす。神社界から青年をしめ出すのは先輩の責任であると私は敢て云う神社界の特に別表神社の先輩諸兄、手ばなしで神社界将来の為活動しよう

と結集した「むずび会」に金と暇

神主の親として

栃木県神社庁教化委員長 長倉肇

去年の十二月はじめ県下神職の会合のあり、古い神職の家柄で現在教員を兼務されている方から、大よそ次のような質問を受けた。

うちの息子は現在高校三年で来年は大学に入りたいと思うが、さ

でどうしたらよいかと家内共々やんでい

やんでいけない。それで親の私のように別な学校を出して教員でもやらせながら神職を兼務して停年退職後神職に専念させてはどうかと考えている。ところが、この方

と神職としての地位に活力を与え給え。

機関紙創刊号発行に際し、私が四十八年間経済力が乏しかった為思う半分も出来なかったことを回顧して乞われるまゝ前途を祝し、創刊の詞とする。

昭和三十八年十二月二十日 筆者現名譽職(社会奉仕)

調停委員、民生委員総務、真岡地区社会福祉協議会長、心配ごと相談員、善意銀行運営委員、子供会育成連絡協議会長、老人クラブ連合会参与

法は経済的には楽だが、私のように五十何才で今日のような神職の会合に顔を出してみると、何となく不安が気がひけて、全く我が身が切なく感じられる。なんとしたらよいものでしょうか。

その時私は、即座にはっきりと最初から神職にするのはおやめなさい、お父さんの歩んだ通りでないのではないですか、と言ったことを今でもはっきりと記憶している。

その理由は後廻しにしよう。或いはとんだ教化委員長だと腹を立てられる方もいるかも知れない。それも後廻しにして。

さて、それから家へ帰って来て

この頃感心に勉強し出した我が息子の後姿を見ながら考え込んだ次第である。

「奴も末は神主にならなければならぬ運命にある。見方によっては俺同様可愛相な奴だが、もう神主になることは決めているらしい。それは平常の言動でわかるし又俺もそれで安心の管なのだが。

だが、大学を出してやっても、若いうちには神主にはしたくないという親心も湧いて来る。

まず、若くして神職界に入ったらどうなるだろうか。第一に、その若さや気位を失ってしまうのではないか。俺同様こ奴は、どこかの学校で、神職の道が祖国の興隆に与かる偉大なる道であることを聞かされ、またそう信じて若い情熱を燃しながら、この社会に入

て来るに相違ない、然しながら、彼の若さや情熱を認め、その抱負を買ひ、その手腕力綱を發揮させ、また若さの故の過失を寛容に扱う何かが、現実の神職界にあるであろうか。神職界にはそんな風風はほとんどないと言つてよい。

青年教師を見るがよい。学校を出て、先生になつた日からは、彼は重大な職責と名誉と、そして信頼される地位につくのである。そのためには日夜努力して勉強を続けるであろう。会社員になつたものを見るがよい。彼等は幹部候補生である。その気位は堂々たるものであり、また経営者も大いにその活躍に期待している。公務員になつたものを見るがよい。彼はどんな人に対しても私は知らない、

出来ないとはいわれないであろう。俺の息子が、学校を出て、どこかの神社に勤めさせて貰つたとして、一体何をやらせてくれるだろう。そして彼は何を憶えるであろうか。

私自身、一つ一つ数えてみて、それは余りいゝ思い出ではない。一年ほどして、私はあきらめて、神明奉仕から去つた。神明奉仕という言葉と私の仕事とが、どう組み合わせても結びつかないからであつた。若いうちに責任のある仕事につき、これに情熱を感じ、仕事に若さや情熱を織り込み、彼の仕事全体の中の有機的部分でありそして熱い鉄のように鍛えて呉れるところ、そんなところに息子を勤めさせたい。

申し訳ないが、親としてそう考えた。

この考え方を押し進めると、若い者は神職になるなどということになるかも知れない。事実後悔や絶望をしている青年神職も多いようである。然し私はそういうのではない。私が言いたいのは、今の神社界の現実、若いものを大事に育てないことなのである。

私は本年度の研究テーマの一つとして、神職の階位、身分、職制の考察、という出来に目をそむぎ近くプリントが出来る予定である。むすび会の人々の批判を願いたいとも思っている。

年輩の大家よりは、このような考え方に對して相当の反撥があるものと思う。それに対して、理論的に立向う用意だけは怠つていないつもりである。

昭和三十七年度事業概要

- 日時 事業 場所 参加人員
- 四月 幹事会(事業計画の件) 於神社庁 一、二名
- 五月 幹事会(氏子青年との交歓会の件) 於神社庁 一〇名
- 六月 県内氏子青年との交歓会 於神社庁 一六名
- 七月 全国青年研修大会参加 於日光田母沢会館 六名
- 七月 講習会「易の理論と実際」 長倉講師 於神社庁 一八名
- 七月 明治神宮、東京大神宮、都神青協との野球参加
- 八月 於明治神宮 二二名
- 八月 神青協関東ブロック総会協力 於鬼怒川 六名
- 八月 氏子青年との交歓野球試合 於宇都宮 九名
- 九月 明治神宮、東京大神宮、都神青協との野球参加於日光十二名
- 九月 幹事会(県内神社々々宝展への協力について) 於神社庁 八名
- 十月 県内神社々々宝展協力 於東武デパート 二一名
- 十二月 幹事会(本年度の反省) 於神社庁 十三名
- 一月 幹事会(総会開催について) 於神社庁 十一名

昭和三十八年度事業概要

三月 総会 於神社庁 二六名

どっかい百性神主は生きています

石橋町下小山

星宮神社 小林 邦 満

私は、石橋町下古山鎮守星宮神社以下三社の十一代目の神主として、父の跡を継いでゆく羽目に落ち入った、考えて見れば、当小林家は下古山に生きている限り、この宿命からはがれられないようだが、勿論、神主だけの収入では家計が成り立たず、ひたすら農業に励んでいる、妹を嫁入りさせ、弟を学校へ入れるためにも、百姓をしなければならぬ。

私は季節的に、東照宮へ助勤して偉い神主さん方の生活に触れる機会を持つている、堂々たる祭式、華やかな祭典などを拝見して、少なからず、劣等感を持つものである。しかし神主の歴史的な存在をふりかえると、百姓神主こそ神主の原始形態であると思える。職業化されない名譽的な立場であるからこそ、氏子に対しても無理を云える。また氏神の神聖を汚すこともないような気がする。近隣

神社界の将来を憂う

日光二荒山神社

吉田 健彦

種々の希望と夢を抱きつつ、神社界に身を投じてより幾多の才力が流れ、ふと我にかえり果して神社界の現状を見るに、これでは

のかと云う疑問が生じた。その疑問は、我々には樂觀出来ない悲観的なものばかりで、お先真暗でこれかどの様にせねばならぬかと思ひ込んでいた矢先に、幸いに栃木県に、青年神職の会、すなわちむすび会が誕生した事は、これからの希望に胸をふくらませていた若い神職に一つの進むべき道を教えてくれた。

又現在の淀みきった空気に身体を蝕まれていた人間等に新鮮な空気を送り、斯界の人々に対しては働く喜びと、希望の灯をともしかつ又、夢を支えたのではなかつたらうか。ましてや神社界の今日の年代層は、余りにも指導的地位にある人間と指導される人間の年の差を縮める役目を果たす中堅層が居ない事に気がついていてあるらうか。世は国を上げて人作りと云う今日、神社界は今尚、悪夢から醒めぬのであろうか。だから、考え方にしろあらゆる物事を実行する上に色々と障害に突き当たるのではないか。それは何故か。これまでに青年神職に対して適切な指導をしてきたかどうか。斯界に於いては指導するどころか、頭から難癖をつけ嫌がらせをする。それでは、神社界の発展を望むどころか、お互いに足を引っぱり合っている事では、これからどうなるのかと憂えずにいられないのは、小生独りだけだろうか。

もう少し大きく社会の動向に目を見開いて、大人的に物事を考えて貰いたいものだ、まさしく、今日の神社界の姿を物事にたとえて云

うならば蒸気機関車みたいなもので、乗客だけが何時も我慢しなくてはならぬものだろうか、楽しかるべき旅行も、トンネルに入れば窓を白いワイシャツは真黒く、乗客の不快指数は増すばかり、スピードの時代に、電気機関車で二時間で行ける所も、その何倍の時間をかけて目的地に到着せねばならぬ。それでは時代の流れに追いついて行けるだろうか、せめてもディゼル機関車位までスピード化を計る努力をして戴き度い。何時までも戦前の夢にたどることなく、現実社会に即応した適切な指導が欲しい。青年神職も此様な時期が長くなれば、長くなる程、若さを失い老化現象を起し、何時まで経っても旧態のままの姿から脱皮する事が出来ず、決してよい結果は得られない事と思う。指導的地位にある人々も、若い人々の盛上りを待つのではないかと、もつと積極的に適切にリードをして戴き度い。

そうする事によって初めて青年神職の力が結集され、斯界の発展の為に尽力するだろう、それには青年神職の活動の場を支えて欲しい。何時までも子供あつかいをする事をやめ、諸君もやれば出来るんだと云う自信を持たせる事ではないか。現在おかれてある青年神職の立場は無に等しく、夢もなく希望もなく、その日々を悶々と過しているのが現状ではなからうか、もし余りこのような状態が長くなると庶人同様になり、ヒロポン患者の如くに斯界の発展をさま

たげる様になりはしないかと憂えずにはおれない。

- 四月 講習会「折口先生の神道観」 矢島講師 於神社庁 八名
- 五月 幹事会 於神社庁 六名
- 六月 刑務所大被式 於宇都宮刑務所 五名
- 九月 氏子青年との交歓野球試合 於日光 十三名
- 九月 他県の神職青年との交歓野球試合(群馬県神社庁)於日光 十三名
- 十月 講習会「日本刀のはなし」 柴田講師 於神社庁 六名
- 十一月 精薄児童収容施設訪問 (栃の実学園)
- 十二月 座談会「むすび会のあゆみ」 於神社庁 六名
- 一月 新年宴会 於宇都宮 五名
- 二月 幹事会 事務処理 六名

先輩諸兄も今日まであらしめた斯界の先人に申訳がたつまい。余り姑根性を起さず、斯界の発展の為に青年神職が微力乍ら尽しているのを温かく育てて欲しい。それに先輩諸兄との種々の話合する機会がない事も非常に段層を広げる基因ではなからうか。先輩諸兄と青年神職が呼吸が合さった時に、初めて、神社神道が世界の宗教として脚光を浴びるのであろう。

青年神職諸君よ、我々は明日にならねばならぬ、重大な使命がある。互いに手を取り合って一人でも多く夢の実現に邁進しようではないか。

氏神のにおい

東照宮並木青年会

会長 齋藤春夫

従来神社と云うと、年寄りだけの独占物であり、我々若者から見れば、厚いベールにとざされ、祭典の夜は、直会の酒に酔って赤鬼と化した年寄り達が、高笑いをしながら鳥居を出てくる姿が妙に印象に残っている。

幼年期は、氏神の祭りには嬉しく、楽しいものだったが、少年期の後半から青年期の今日では封建時代の遺物としか見えない。こうした時、東照宮の並木青年会に關係するようになった。日光市民の一人として、東照宮と云う所は御社殿の壮嚴さに圧倒されて、そこに住む神主さん達も、何かしら近より難い人達と印象づけられた。しかし我々並木青年会の若者が、その主たる事業として、杉並木街道の清掃保護、また石鳥居の御繩奉製などの奉仕を通じて東照宮の若い神主さんと接するようになって、従来もっていた印象がだん／＼薄れ、或るときは親しい相談相手として、或るときは、はげしい口論をするようになった。勿論、農村青年と神主青年とは物の見方にも、大きな相違があるが、その相違があればこそ、時には青年神主の言葉に、強い感動を

受けることがある。例えば、あの華麗をきわめる東照宮も我々の氏神さまと、根本の理想は違いないとのこと、ことによると、氏神さまの方が立派だと思ふ、人間も着物がよって、中身の判断をあまりすることがある。氏神さまの境内を一人で歩きながら考へてみると、なるほど、いまは亡き祖父祖母への愛着に似たものが匂ってくる。いま俺の立っている大地の匂ひが結局氏神さまの匂いだらう。日本全国いたる所に氏神が鎮座し、この匂を持ってしているとすれば、青年神主が口ぐせのように云う、愛国心が、日の丸とかの気持も理解できそうな気がする。しかし氏神さまは、年々老い朽ちて行く、このまゝでは誰かにすまぬような気がする。では、何が悪いのか、神社をとりまく組織が悪いのだ、こうした時代に必要なのは、若い力ではないのか。

神主老若交代論

鹿沼市磯

磯山神社 金子宏一

私は小さい頃、神主と云えば、年を取った白髪姿を想像して居りましたが、現在の神社界には、そんな奉平ムードは通用しなくなつて来たようです。これは時世でしようか。戦前と戦後の神社の立場が一変してしまつた今日、神職自身の考え方は、果して変わったでしょうか、全国の大部分の神社は、その維持経営のため、変らざるを得ない状態か、または、他の方面に於いて生計を立てるとか、兎角、神社では、食っていけないと異口同音に答えることとせう。戦前、政府の支持のもと黙って坐っているれば、生きてゆけた人達が、時代が変わつたと云え、急激な態勢の変化に適應できるでせうか、生化学の分野から見ても、おそらく、神社界のこの急激な変化に、五〇才・六〇才の人達を適應させるのは無理と云わねばなりません。ではこの荒波に同調する可能性はど

こにあるか、勿論、それは青年神職にこそあるものと思われれます。いづこの社会に於いても、青年層の漸新なアイデアに、成・老年層の円熟した体験を加味してこそ、発展があると思われれます。最近、青年神職の立場が、クローズ・アツプされて来まして、大変嬉しいことだと思ひますが、国学院神道科の応募状況などから推測しても、神職と云う職業が、若い世代には全々魅力の無いことがわられます。こうした魅力のない神社界の最大の原因は個々の神社に、甚だ狭い、みにくい人間關係にあると思ひます。人間は自分だけで偉くならうとしても、決して出来ないことで、周囲の人々、後輩の信望と支援を得てこそ、初めて、指導的な立場に居る人として価値があると思ひます。特に現代の如く組織の社会に於いては、なお更

余りにも理想と現実が違ふのには驚かずにはいられなかつた。好きで入った道でもあるし？神社界の将来歩むべき道、又姿はどうあるべきかについて色々と考えてみたが、余りにも希望の持てるものは小生独りだけであるうか。青年神職らは、現在の神社界の動向に対して何にを考えているのであらうか、互いに斯界の発展は如何にしたらよいかと云う夢を持つて居るだらうか。小生もささやかな夢と青写真を持つて居るが、この夢と青写真が現実化され、人々の目前に表われるのは何時のことだらうか。そう云う事に自問自答して見ると吐息のみが出て甚だ心細い限りである。

ある青年神職の夢

日光二荒山神社 岡田靖

神社に奉職し、春夏秋冬迎える 事三度、其間色々の体験を通して

四方の里、見曾祭波します
大神の境内に花咲く若松の群

元唐沢山神社神職

小島徳靖

たえず我々青年神職は夢を持っている。それは如何なるものかは人々によって違ふだらうが、根底に流れる思想は変らざる、斯界の発展に寄与したい考え方に変わるまい。その夢を実現するには、これから先、有形無形の障害物が横たわっており、それをまず一番先に取り

除かねばなるまい。それには、我々青年神職の若きにあふれた力が必要ではないかと思われる。斯界が何時世界の人々を救える宗教になり得るかば、これからの我々の夢がかなえられ、現実に入りの目前に表われて来た時である

社 頭 雑 感

人の道あやまらず生きて吾が世子は 愛ぐし乞女と結び挙式す
赤と白の神橋かゝりて大前の 杜のみどりはきわだつて見ゆ
福寿会の姥しわぶきていそいそと 聞きとりがてに物語りゆく
車買ふて交通安全を祈り居る 人の命の尊くおも臥ゆ
さ来年の農家の庭にガレイジが 立つ日岬近く教習所にかよふ
若きあり年輩者ありサーピンス車 四十教程の客をのせ行く
うばお父が霊前に供う料を頌ら 善意銀行に向う日近し
首都圏のせいびの中に氏子ありて 軒列なみは松立てにけり
百年の夢を描きて山はだは 雑木変りは杉檜立ちをり
元日は日の丸の旗立てましよう オリソピックを目の前にして

柳 田 耕 平 敬 白

(昭三八・二二・一五作)

会 員 名 簿

(五十音順)

- | | | | |
|-----|----------|---------|-------------|
| 稻三郎 | 宇賀野房亮二 | 大田原神社 | 宇都宮市一の沢町二九二 |
| 大岡田 | 護国神社 | 大田原神社 | 大田原市大田原 |
| 潮子 | 三島神社 | 黒羽町大字寒井 | 日光市中宮祠二荒山内 |
| 金子 | 磯山神社 | 同 | 同 |
| 里崎 | 同 | 同 | 同 |
| 是林 | 宇都宮神社 | 鹿沼市磯町 | 同 |
| 小則 | 八雲神社 | 田沼市白岩 | 同 |
| 提邦 | 唐沢神社 | 鳥山町二六九 | 同 |
| 佐藤 | 星宮神社 | 佐野市富士町 | 同 |
| 篠田 | 日光二荒山神社 | 石橋町下古山 | 同 |
| 未安 | 宇都宮二荒山神社 | 日光市山内 | 同 |
| 田中 | 日光二荒山神社 | 宇都宮市馬場町 | 同 |
| 永沢 | 流尾神社 | 日光市中宮祠 | 同 |
| 長島 | 東照宮 | 日光市春日町 | 同 |
| 人見 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 藤岡 | 温泉神社 | 日光市山内 | 同 |
| 松本 | 温泉神社 | 日光市山内 | 同 |
| 松田 | 三柱神社 | 日光市山内 | 同 |
| 宮原 | 八坂神社 | 日光市山内 | 同 |
| 山杉 | 加藤神社 | 日光市山内 | 同 |
| 湯沢 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 湯沢 | 日光二荒山神社 | 日光市山内 | 同 |
| 吉田 | 同 | 日光市山内 | 同 |
| 宮田 | 八坂神社 | 日光市山内 | 同 |
| 沼田 | 須賀神社 | 日光市山内 | 同 |
| 荒川 | 大神神社 | 日光市山内 | 同 |
| 横田 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 吉田 | 三箇神社 | 日光市山内 | 同 |
| 稲田 | 唐沢神社 | 日光市山内 | 同 |
| 荒川 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 沼田 | 須賀神社 | 日光市山内 | 同 |
| 宮田 | 大神神社 | 日光市山内 | 同 |
| 吉田 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 湯田 | 日光二荒山神社 | 日光市山内 | 同 |
| 山杉 | 加藤神社 | 日光市山内 | 同 |
| 宮原 | 三柱神社 | 日光市山内 | 同 |
| 松田 | 八坂神社 | 日光市山内 | 同 |
| 松田 | 温泉神社 | 日光市山内 | 同 |
| 藤岡 | 温泉神社 | 日光市山内 | 同 |
| 人見 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 長島 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 永沢 | 流尾神社 | 日光市山内 | 同 |
| 田中 | 宇都宮二荒山神社 | 日光市山内 | 同 |
| 未安 | 日光二荒山神社 | 日光市山内 | 同 |
| 篠田 | 宇都宮二荒山神社 | 日光市山内 | 同 |
| 佐藤 | 星宮神社 | 日光市山内 | 同 |
| 篠田 | 宇都宮二荒山神社 | 日光市山内 | 同 |
| 未安 | 日光二荒山神社 | 日光市山内 | 同 |
| 田中 | 流尾神社 | 日光市山内 | 同 |
| 永沢 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 長島 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 人見 | 温泉神社 | 日光市山内 | 同 |
| 藤岡 | 温泉神社 | 日光市山内 | 同 |
| 松本 | 三柱神社 | 日光市山内 | 同 |
| 松田 | 八坂神社 | 日光市山内 | 同 |
| 宮原 | 加藤神社 | 日光市山内 | 同 |
| 山杉 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 湯沢 | 日光二荒山神社 | 日光市山内 | 同 |
| 湯沢 | 同 | 日光市山内 | 同 |
| 吉田 | 八坂神社 | 日光市山内 | 同 |
| 宮田 | 須賀神社 | 日光市山内 | 同 |
| 沼田 | 大神神社 | 日光市山内 | 同 |
| 荒川 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 横田 | 三箇神社 | 日光市山内 | 同 |
| 吉田 | 唐沢神社 | 日光市山内 | 同 |
| 稲田 | 東照宮 | 日光市山内 | 同 |
| 荒川 | 須賀神社 | 日光市山内 | 同 |

あとがき

序長をはじめ先輩諸氏の御寄稿を得て、めでたく創刊を見た喜びとともに、この会報が心ある人に読まれていかなる反響を呼ぶか期待を持つものである。編集方針としては、社交儀礼的な言葉はつとめてさけたつもりである、と云うのは、その種の機関紙は斯界に多過ぎるからである。神社の将来を心から思う人の卒直な言葉を歓迎したのである。従って批判的な、攻撃的な言葉も少なくないが、許し合へる仲間の言葉として聞いていただきたい。少くとも年間二回は発行したいと思うが、貧乏世帯故に無理かもしれない。これを読まれた多くの人が、大いに噴り不愉快になり、編集部へのお叱り待つものである。(荒川本一)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|------|------|------|------|-----|------|
| 出 産 祝 | 荒川本一 | 吉田健彦 | 提田克之 | 中島敏幸 | 宮原功 | 伊藤七郎 | 二橋正彦 | 小島徳靖 | 中島敏幸 | 岡田光澄 | 水谷正 | 山田文明 | 大分県 | 茨城県 | 滋賀県 | 北海道 | 群馬県 | 静岡県 | 北海id | 結婚祝 | 伊藤七郎 | 二橋正彦 | 小島徳靖 | 中島敏幸 | 岡田光澄 | 水谷正 | 山田文明 |
|-------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|------|------|------|------|-----|------|